

千葉市内主要貝塚資料分析報告(令和5年度)

西野 雅人

はじめに

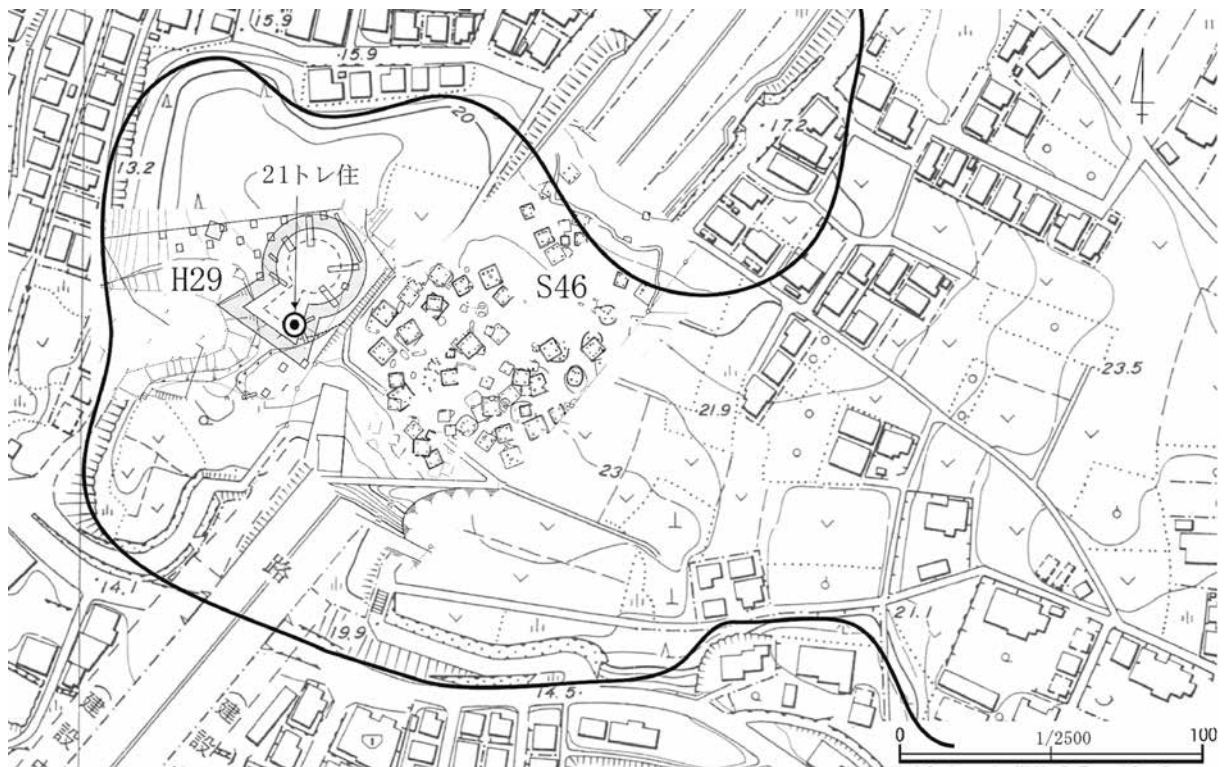
千葉市埋蔵文化財調査センターでは、研究事業の一貫として市内の発掘調査で採取された未整理の貝サンプルの分析を継続的に実施しており、本誌44・46・49号に続いて成果を掲載する。事業の概要と分析方法については44号に記載した。今回取り上げたのは縄文時代中期1遺跡、古墳時代1遺跡、中・近世1遺跡である。

I 西花遺跡 H29

1 概要

西花遺跡は千葉市中央区大森町に所在する。村田川河口低地の北側に開く生実谷の大巖寺支谷に面した標高20mの台地上に立地する。遺跡は東西600m、南北400mと広いが、京葉道路によって西側の一部が分断されている。平成29年10月～11月にかけて分断された部分の4,299㎡を対象とした確認調査を実施し、報告書が刊行されている(長原2018)。宅地造成計画に伴うものであるが、造成は実施されていない。

確認調査は、古墳を想定したトレンチを配置しておこなった。その結果、円筒埴輪をもつ全長33mの前方後円墳1基と古墳時代中期の住居跡2軒を検出している。貝層は古墳墳丘前方部の南東端に設定した21



第1図 西花遺跡の発掘調査

トレンチで検出したものである。狭いトレンチ内で、墳丘下から貝層と土師器が出土しており、古墳時代中期の住居跡の覆土中に形成された貝層とみられる。当遺跡では、昭和46年に京葉道路の工事に伴う調査を実施しており、90軒の住居跡を検出している(古内・三森他1973。当時の名称は大森第2遺跡)。古墳時代中期の住居跡は33軒あり、分布は稠密である。うち4軒で貝層を伴っていたが、分析成果はない。今回の調査地点は集落の西端部にあたり、前方後円墳は、集落外縁部の台地突端部を選んで築造されたものであろう(第1図)。

貝サンプルは15.2リットル採取されており、全量を分析・保管対象とした。保存状態が悪く、計測可能個体は乏しかったが、ハマグリ of 殻長のみ計測。微小貝類が165個含まれていたが分析は未了である。

2 分析結果

9科10分類群の165個体を同定した(第1表)。ハマグリが80.9%と圧倒的に多く、シオフキとアサリを含めた3種で93.4%になる。他の貝種はごく少ない。内湾砂泥底でハマグリを中心とした貝の採取が行われたのであろう。ハマグリ of 平均±標準偏差は58.6mm±14mmであった。

計測個体が少ないため傾向をとらえるのは難しいが、きわめて大きな個体も生息する状況で、小さなものは避けて採取したものであろう。古墳時代には、大きな個体のみを選んでいる事例が多いが、その傾向は縄文時代晩期からはじまって弥生時代から古墳時代前期をピークとする。本例はその傾向がやや緩む古墳時代中期の事例であり、ある程度小さな個体も採取しているのは、時期的な傾向とみることができるであろう。昭和46年調査区の貝層を伴う住居跡をみると、多数の土器の出土や多量の焼土の堆積など祭祀や饗宴などを想起させる例が目立っている。今回の調査は小規模であるため明確ではないが、土器がまとまっていることから同様の事例に加えることができるかもしれない。

第1表 貝種組成

種名	全体	%
ハマグリ	148	80.9%
シオフキ	12	6.6%
アサリ	11	6.0%
ウミナナ科	4	2.2%
ツメタガイ	3	1.6%
イボキサゴ	1	0.5%
スガイ	1	0.5%
アカニシ	1	0.5%
サルボオ	1	0.5%
マガキ	1	0.5%
合計	183	100.0%
水洗前体積(ℓ)	15.2	
微小貝	165	

第2表 ハマグリ殻長

mm	個体数
-45.0	1
-50.0	2
-55.0	7
-60.0	
-65.0	1
-70.0	
-75.0	2
-80.0	1
-85.0	
-90.0	
-95.0	1
試料数	15
平均	58.6
標準偏差	14.0



第2図 貝層検出状況

文献

長原亘2018「西花遺跡」『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書—平成29年度—』千葉市教育委員会
古内茂・三森俊彦他1973「大森第2遺跡」『京葉』千葉県都市公社

Ⅱ 生実城跡 S63・H6・R3

1 概要

村田川河口の北側に張り出す広い台地・段丘面上の南北約800m、東西約700mを城域としている。現在の標高は17～21mだが中世以降の造成による改変が大きく及んでいる。中心部分は、昭和40年代以降の造成によって大きく損なわれているが、昭和63年から平成9年にかけて、約22,500㎡の本調査を断続的に実施しており、中・近世の遺構・遺物が数多く出土している。その結果、中世城郭と近世・森川藩の陣屋跡について、構造や年代がかなり明らかになった。15世紀から16世紀の原氏の本拠地であり、小弓公方もここに拠ったと考えられている。地下式坑、中世墓、建物跡と推定されるピット群、空堀などを調査しており、堀や地下式坑などから多くの遺構内貝層を検出している。『全国地下式坑集成資料集』(房総中近世考古学研究会他2007)では、地下式坑102基のうち貝層をもつものは38基にも及ぶ。県内では、38か所の遺構内貝層を検出し、24遺構の分析が行われた中央区中野台遺跡(西野2006)と並ぶ良好な資料である。しかし、貝サンプルや動物骨の分析は未了である。今回報告するのは第1表に示した3回の調査で得られた貝サンプルの分析結果である。

S63 報告書刊行済(長原・築瀬他2002)であるが、未洗いの貝サンプルを発見した。ラベルには「E-39-C 地下式横穴」とあり、報告書の1D-12号地下式坑覆土中層(第36図断面11層)から採取されたものであることが判明した。年代は中・近世、15世紀から19世紀と絞ることができないが、土嚢袋8袋のうち36リットル分を分析対象とし、そのほかは簡易フルイ後に廃棄した。微小貝を47個検出した。

H06 平成6年4月から10月にかけて、城域の東半分から大手堀の東側に至る範囲で、県道の両側を路線状に調査している。整理作業が未了であるため正確な位置や遺構は不明だが、中・近世ピット群付近で、保存状態の悪い貝殻を一括で取り上げたものである。唯一保存状態がよかったI区34cbのみサンプルとして扱った。採取量は0.6リットルである。それ以外の現地採取貝類の最小個体数は以下である。アカニシの軸など、遺存しやすいものに偏っている可能性が高い。

G区・1号堀 アカニシ3、ハマグリ5、カガミガイ1、シオフキ1

H区・1号堀 アカニシ11(大きな個体を選んでいる)

O区・30D-a アカニシ1、ツメタガイ1、シオフキ2

R03試掘 令和3年10月に実施した試掘で土坑1基を検出。掘り込みを確認するために掘り下げた際に出土した貝を採取したものである。位置は、中世生実城跡の本体ではなく、南側の集落部、小字「町並」の中心付近にあたる。過去の報告では「IX郭」と呼び、16世紀後半に生実城が整備された時期に遡る可能性がある(長原・築瀬他2002)。調査区の北側の道はその後も長く幹線として使われており、迅速測図をみると明治時代にも道沿いに家が並んでいる。調査区はこれらの家の背後にあたる。中世以降の集落に伴う土坑の可能性はある。サンプルは1.4リットルで、微小貝を3個検出した。

第1表 貝サンプル一覧

サンプル名	遺構	時期2	採取量	分析量	備考
S63-1D-12	1D-12号地下式坑	15-19C	土嚢8	36.00	土坑下部の貝層
H06-34cb	I区ピット群		0.20	0.20	
R03試掘	IX郭	不明	1.40	1.40	16世紀後半?

2 分析結果

全体で13分類群の1,812個体を同定した。S63-1D-12はシオフキが60.3%、イボキサゴが28.4%と、この2種で9割近くを占める。ハマグリも多く、アサリを少量含んでいる。淡水種のマルタニシを1個体含む以外は内湾砂泥底干潟の普通種で占められている。H06-34cbは全体で31個体のみで、アサリとハマグリが主体でシオフキが混じる。R03試掘は全体で35個体のみで、シオフキが20個体でアサリ・バカガイ・ヤマトシジミ・イボキサゴ・ハマグリが混じる。

H06-34cbは普通種のみだが、R03試掘には同じ漁場で採取可能であるにも関わらず、古代以前にはあまり採取されないバカガイと、汽水種のヤマトシジミが混じる。

計測値をみると、S63-1D-12の二枚貝3種は中・近世のデータとして平均的で、イボキサゴはやや小さい。注目されるのはH06-34cbであり、二枚貝3種とも小さな個体のみである。これほど小さな貝のみの事例はきわめて希であって、通常貝類採取をしていない人物が、なんとか汁物数杯分の貝を持ち帰ったというものであろう。

第2表 貝種組成

貝種	S63-1D-12	%	H06-34cb	R03試掘
シオフキ	1052	60.3%	1	20
イボキサゴ	496	28.4%		1
ハマグリ	140	8.0%	13	1
アサリ	30	1.7%	17	6
アラムシロ	12	0.7%		
ウミナナ科	5	0.3%		
アカニシ	4	0.2%		
ツメタガイ	2	0.1%		
マガキ	2	0.1%		
カガミガイ	2	0.1%		
マルタニシ	1	0.1%		
バカガイ				4
ヤマトシジミ				3
合計	1746	100.0%	31	35
水洗前体積 (ℓ)	36.0		0.2	1.4
微小貝	47			3

第3表 貝類計測値分布

mm		イボキサゴ		mm		シオフキ		ハマグリ		アサリ	
S63				S63		H06		S63		H06	
-10.0		-15.0									
-11.0	1	-20.0									1
-12.0	1	-25.0			1						4
-13.0	15	-30.0		1				5		1	3
-14.0	14	-35.0		12				5	2		5
-15.0	3	-40.0		72				12	1		8
-16.0		-45.0		99				8			3
-17.0		-50.0		15				7			
-18.0		-55.0		1				5			
-19.0		-60.0						10			
-20.0		-65.0						2			
-21.0		-70.0						7			
-22.0		-75.0						1			
試料数	34	試料数	200	1		57	8		17	8	
平均	13.06	平均	40.36	23.87		48.93	29.93		36.68	24.23	
標準偏差	0.80	標準偏差	3.48	-		11.32	2.78		3.73	3.35	

文献

菊池健一2001『千葉市生実城跡』（財）千葉市文化財調査協会

長原亘・築瀬裕一他2002『千葉市生実城跡―昭和63年度・平成3～6年度調査―』（財）千葉市文化財調査協会

築瀬裕一2003「生実城跡の人骨を伴う地下式坑について」『財団法人千葉市教育振興財団埋蔵文化財文化財センター年報16―平成14年度―』

西野雅人2006「貝類の分析」『千葉市中野台遺跡・荒久遺跡(4)―千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書V―』千葉県教育振興財団

鶴岡英一2005「貝サンプルの分析結果」『平成16年度市原市内遺跡発掘調査報告』郡本遺跡群，市原市教育委員会

Ⅲ 蕨立遺跡

1 遺跡と調査の概要

(1) 遺跡の概要

蕨立遺跡(別称・蕨立貝塚)は千葉市若葉区千城台西2丁目(旧地名:坂月町蕨立)に所在する。千葉市中央部を流れる都川の支川のひとつである坂月川には、枝分かれした古山支谷と大道山支谷の谷奥部に中期大型貝塚が分布する。古山支谷の加曽利貝塚・滑橋貝塚、大道山支谷の蕨立遺跡とさら坊貝塚である。当遺跡は標高30~34mの台地上に立地し、短く浅い谷を挟んだ南東側にさら坊貝塚が隣接する。

(2) 調査の概要

当遺跡の発掘調査は以下の4度行われている。①昭和26年(1951)4月の『千葉市誌』編纂に伴う調査(武田1951・1953・1955)。②昭和41年(1966)の坂月ニュータウン(千城台団地)造成に伴い、造成の合間に一部のみ調査を行ったもの(武田・坂東1966、武田1966)。いずれも市の委託を受けて、前者は武田宗久らが、後者は千葉県立千葉高等学校郷土クラブ、千葉市立千葉高等学校考古学クラブ、千葉県立東金高等学校考古学クラブの合同調査として実施。③昭和51年(1976)の鉄塔の立替えに伴う調査(武田・相京他1977)、④昭和54年11月~昭和55年3月(1979~1980)の宅地造成に伴う約10,000㎡の調査(岡崎・石井・津田1982)。

昭和26年の調査 視認された貝散布の一部を調査して阿玉台式後半から加曽利EⅠ式の住居跡22軒・小竪穴9基を検出、うち住居跡14軒・小竪穴2基で貝層を形成していた。埋葬人骨は住居跡3軒・小竪穴3基から9体が出土している(4号住居2・21号住居1・22号住居3・28号土坑1・29号土坑1・30号土坑1)。また16号住居で散乱骨が出土している(武田1976、2-43図説明文及び2-46~50図写真・説明文)。4号住居では頭部に小さめの深鉢を被せた仰臥人骨と土製耳飾を着装した屈葬人骨、21号住居では伸展葬1体が出土。22号住居では伸展葬2体と・屈葬1体の3体が床面付近で近接して出土、伸展葬1体は単独で、もう1体の伸展葬とその頭部に脚部を乗せる屈側1体は折り重なっている。28号土坑では倒位にある胴部以下を欠損する深鉢土器から幼児骨が出土した。29号土坑では間層を挟んで2個体の土器が、その下から屈葬人骨が出土、土器被りの可能製があるとされている。30号土坑では底面付近から屈葬人骨が出土した。なお、29号住居では覆土上層から底部を欠く倒位の深鉢から幼児骨片が出土している(埋葬骨9体には含まれていない)。手書き調査記録には「鯨類加工品」の記載があり、『千葉市史 原始古代中世編』所収の鯨類肋骨製儀仗様製品(54p.2-16図)がこれにあたるものとみられる。付録Ⅰにこの時の調査概要報告を所収した。

昭和41年の調査 坂月ニュータウン(千城台団地)造成の合間に一部のみ調査を行ったものである(武田・坂東1966、武田1966)。市の委託を受けた蕨立貝塚発掘調査団(発掘担当者武田宗久、指導助手川戸彰)が主体となり、千葉県立千葉高等学校郷土クラブ、千葉市立千葉高等学校考古学クラブ、千葉県立東金高等学校考古学クラブ、及び地元の有志が参加して、4月8日から6月15日まで合同調査が行われた。調査前に実施した地形測量とボーリングによって把握した馬蹄形に点在する28か所の貝層にA・B・B'などの記号をつけ、重機による掘削がはじまっていた地点から着手した。わずかな予算と調査日数から、7地点は未発掘に終わった。調査した住居跡は19軒(加曽利EⅠ式期16・EⅡ式期3)、小竪穴は10数基、埋葬人骨は9体である。

昭和51年の調査 鉄塔の立替えに伴い400㎡が対象となったが、大半がすでに削平されており、昭和51年11月20日から12月12日にかけて概ね9m四方、80㎡の本調査を実施している(武田・相京他1977)。正確な調査範囲は不明であるが、第1図の蕨立遺跡(南群)と表記した部分の下に見える四角く網掛けした付近で

ある。遺構は検出されなかったが、200片程度の土器が出土し、加曽利EⅠ式からEⅡ式が主体である。阿玉台1b式の大破片が1点あるほか、称名寺式や奈良・平安時代の土器もみられる。

昭和54年の調査 昭和54年11月～昭和55年3月(1979～1980)、宅地造成に伴い約10,000㎡の調査を実施している(岡崎・石井・津田1982)。千城台団地と千城台西中学校の間に森林として残されていた部分であり、第1図で蕨立遺跡(北群)とした部分にあたる。このときの調査では、昭和26年に調査した「蕨立貝塚」とは別の集落であることを意識して「蕨立遺跡」と称したものとみられる。しかし、両地点を一つの図に示したものが存在しないことから、集落が二つあることを明確にしたのは今回が初めてである。千葉県史では「蕨立貝塚」としているが(古内2000)、現在の包蔵地名をとって蕨立遺跡の北群、南群と称することとした。

昭和54年調査の報告書は二つある。一つは鉛筆で書かれた本文と、挿図や写真図版の出来上がり見本を綴じた未公表のものであり、調査の実施主体や調査員などは記されていない。縄文時代の住居跡25軒、土坑18基、奈良・平安寺時代の住居跡31軒、ピット12基をしている。もう一つは『遺跡論集Ⅱ—蕨立遺跡を中心とした縄文時代中期初頭集落址の研究—』という名称で刊行されたものである。岡崎文喜氏・石井穂氏が「遺跡研究会」の名前で編集・刊行を行っている。報告の対象となっているのは縄文時代の遺構・遺物であり、奈良・平安時代の遺構・遺物は対象外である。遺構の性格についての判断も齟齬が多く、風倒木痕など遺構でないと判断していたものを小竪穴とするなど、手書きの報告の妥当な判断が採用されていない。ここでは正確や時期などを検討して概要を記しておく。

縄文時代の住居跡の年代は阿玉台1b式～Ⅳ式、加曽利EⅡ式であり阿玉台式期のかなり規模の大きな集落といえる。小竪穴は5基あり、阿玉台式後半主体である。そのほか、土器片錘が125点、石器は実測点数で打製石斧14点、磨製石斧6点、礫斧1点、磨石類10点、石皿1点、石鏃18点、石匙1点がある。

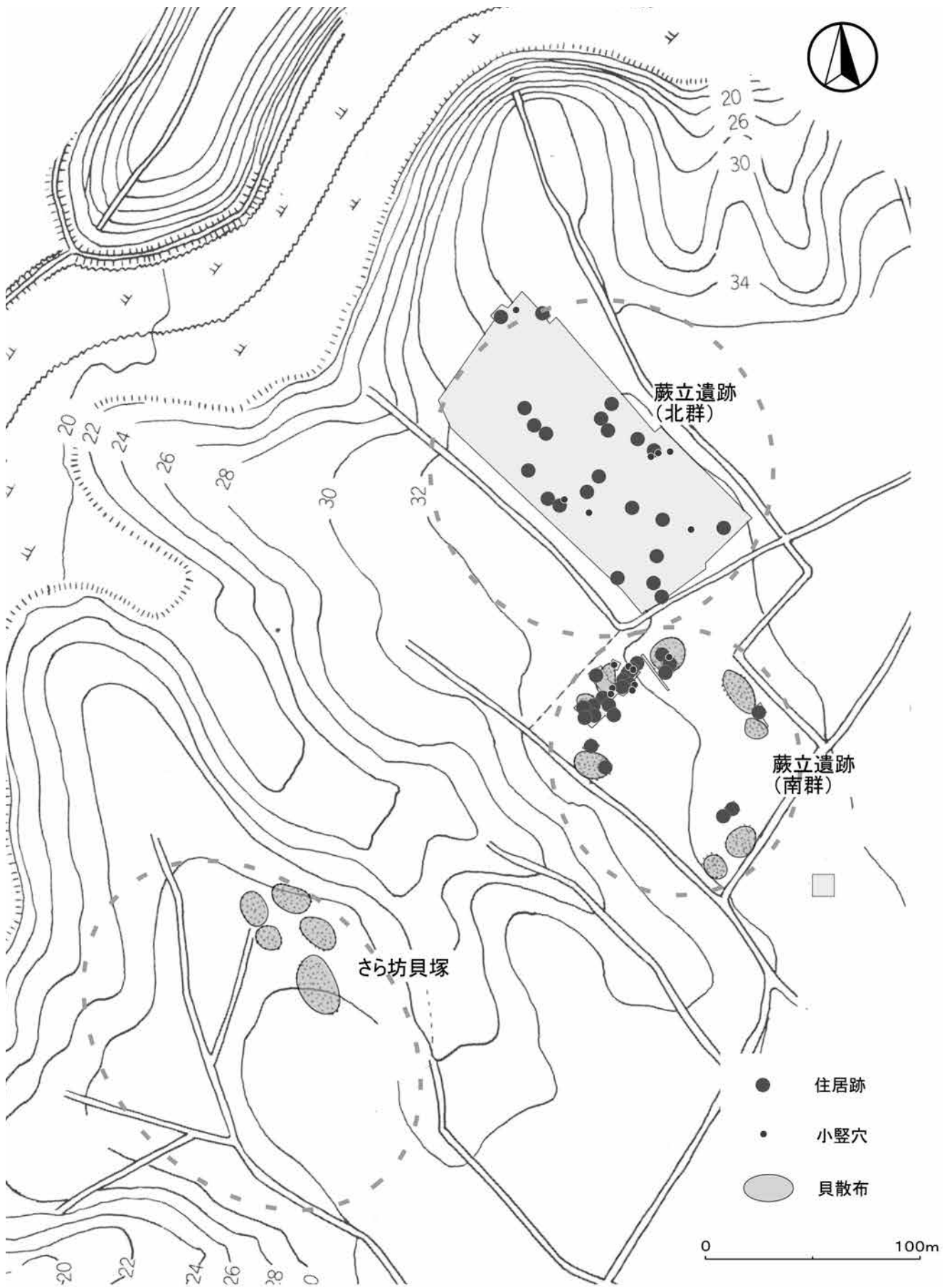
収蔵資料と再整理 千葉市埋蔵文化財調査センターには今回分析を実施した貝サンプルのほかに、整理箱40箱以上の出土遺物を所蔵している。どの調査の資料であるかの確認は未了であり、今後、遺物と図面を再整理し、縄文時代の集落の全体像の見直しが必要である。奈良・平安時代の集落については未公表であり、これについても整理・報告が必要である。

さら坊貝塚の調査 この間、南西の谷を挿んださら坊貝塚でも造成工事が行われた。記録と資料が残されたのは、昭和40年調査の住居跡1軒・小竪穴1基分に過ぎない(後藤1974)。遺物については、ほかに蕨立遺跡の調査時に行われた遺物回収作業の時のものがある。昭和40年に明治大学の学生が中心になって行われた調査では、頭部に甕をかぶり、左腕にイタボガキ製の貝輪をはめた人骨を検出している。性別を男性としたものがあるが、成人女性である。埋葬骨は、周囲の土ごと工業用パラフィンで固定され、現在加曽利貝塚博物館に展示されている。なお、千葉市教育委員会 で保管している土器等のなかから鹿角製腰飾1点を発見した。別に報告する予定である。

(3)集落のあり方

蕨立遺跡とさら坊貝塚の3つの縄文中期集落は、いずれも未調査の範囲を多く残したまま台地ごと失われた。第1図は蕨立遺跡の北群・南群とさら坊遺跡の調査区、遺構分布、貝散布の大まかな位置を地形図に重ねたものである。正確な位置合わせは不可能であり、おおよその位置にはめ込んだものである。

調査前に記録された蕨立遺跡の貝散布は環状を呈しており、加曽利EⅠ式を中心とした遺構は貝散布の位置から検出したものが多い。しかし、住居跡と小竪穴の分布には規則性が認められず、「中央広場」を想定するのは困難である。緩やかに西側に傾斜する地形も他の環状集落とは異なっている。これを「南群」と



第1図 蕨立遺跡・さら坊貝塚模式図

し、阿玉台式を中心とした北側の遺構分布を「北群」と呼ぶことにしたい。北群の集落は、阿玉台式から加曽利EⅠ式まで継続する集落とはいいがたい。東京湾東岸の中期大型貝塚に概ね共通する特徴は、①開始と消滅の時期がほぼ一致すること(阿玉台・勝坂式後半期～加曽利EⅡ式期末ないしEⅢ式期始め)、②住居跡と小竪穴(貯蔵穴)が稠密に分布して環状構造を呈することであり、千葉市付近では③斜面ないし台地上に大規模な面状貝層を伴うことも共通点である。蕨立遺跡は以上の3点とも当てはまらない。いっぽう、さら坊貝塚はほとんど未調査のまま造成が行われてしまったが、貝や土器の分布範囲・密度、工事中に目撃された稠密な遺構分布から、蕨立遺跡よりずっと大きな集落とみられている。昭和41年5月に集落の縁辺部で採集された土器(千葉市教育委員会保管)をざっと確認したところ、阿玉台式後半から加曽利EⅠ式であった。第1図の地形をみると、点線で示したような範囲の環状集落であったとも考えうるが、決め手を欠いている。EⅠ式期にはさら坊貝塚と併存したとみられるが、環状集落が二つ並ぶタイプではないとみてよいであろう。阿玉台式期の途中で蕨立遺跡の北側の集落からさら坊遺跡に中心が移ったとみて大過あるまい。EⅠ式期の蕨立遺跡南群の性格が問題となるが、大型貝塚に隣接する環状構造をもつ小規模集落が候補となるであろう。同様の事例として、千葉市有吉北貝塚・南貝塚に隣接する鎌取場台遺跡・南二重堀遺跡、市原市草刈貝塚に隣接する草刈六之台遺跡を挙げることができる(西野2008)。

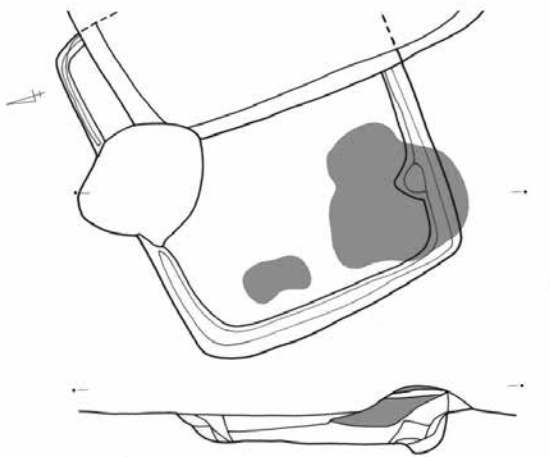
2 貝サンプルの採取と分析方法

(1) S41サンプル

貝サンプルが採取されたのは、昭和41年と昭和54年の南群の調査である。昭和41年のものは、①B地点貝層、②H貝層というラベルが付いたものと、③ラベル不明の3単位に区分できる。いずれも未水洗の状況であったが水洗前の堆積の計量を忘れてしまった。水洗・選別は1cm・5mm・2.5mm・1mmのフルイを使って行い、全量を分析・保管対象とした。そのほかに現地で任意に取り上げられた貝類がいくらか混じっていたが、これは保管対象とはせず、標本・普及用として利用することにした。公刊された調査区の図面(千葉市史編纂委員会1976)には示されていないが、未公表の県立千葉高郷土クラブの略報(武田・坂東1966)にA～Kの地点が記され、調査結果は県教育委員会充ての報告文書(武田1966、付録1)に記載されている。それによると①の「B地点貝層」は南東側で調査されたNo.2住居跡、②の「H貝層」は北部の調査区のNo.15住居跡の覆土内に形成された貝層から採取したものであろう。遺構の時期はいずれも加曽利EⅠ式期とされている。土器の再確認ができていないが、この調査で取り上げられた土器の大半はEⅠ式であり、前後の時期はごく少なかった。加曽利EⅠ式期のサンプルとしてよいであろう。なお、サンプルからは骨片2点と微小貝91点を検出した。

(2) S54サンプル

昭和54年のサンプルは古代の住居跡内貝層から採取されたものである。既刊報告書(岡崎・石井・津田1982)は縄文時代のみ取り上げており、古代の成果は未報告であるが、付録の冒頭で触れる手書きの概報と挿図・写真図版の見本が存在する。貝層を検出したのは7号住居跡であり、サンプルに付されていたラベルの「L-7」と符号する。住居跡は3.5×4.1m、確認面からの深さ40cmの竪穴住居跡である。貝層は、竪穴の外から内側にかけて傾斜しつつ、最大40cmのレンズ状に堆積している(第2図)。平面図では貝層の範囲が竪穴の輪郭をはみ出しているが、実際は、断面図のように確認面よりかなり上で貝層を掘り残したことによるものである。竪穴の掘り込みが確認面よりかなり上まで遺存していたことは第3図の写真に



第2図 7号住居跡



第3図 7号住居跡貝層

表れている。貝層は二つのブロックに分かれており、竪穴外側の径1.6mの大きいブロックは土による間層を挟んで上部・下部の貝層に区分できる。0.8×0.4mの小さなブロックは上部貝層のほうに続くものであろう。この窪みからは復元可能な土器が多数出土しており、8世紀末を中心として、8世紀後半から9世紀代のものが混じるようである。以上から、貝層は、住居の廃絶・埋め戻し後の窪みに土器群とほぼ同時期に廃棄したものとみられ、時期は平安時代(9世紀代)と推定される。サンプルは水洗・分類済みの常態で整理箱3箱分保管されており、全量を分析・保管対象とした。分析結果は時代ごとに提示する。

3 分析結果

(1) S41の分析結果

貝種組成 縄文時代中期のS41サンプルでは、10科16分類群の15,381個体を同定した(第1・2表)。なお、調査時の記録にあって今回同定されなかった貝種はイボニシ・ナガニシ・ツノガイ(類)・ベンケイガイ・ナミマガシワ・イタボガキ・マツカサガイの7分類群である。分析を実施した3単位のサンプルは、いずれもイボキサゴが圧倒的に多い。全体では91.2%を占め、②では98.7%に及ぶ。他の種は少ないが、①ではウミナ科、③ではヤマトシジミがまとまっており、ウミナ科とハマグリもやや多かった。サンプルごとのばらつきが大きい、採取地点・層位が不明確であるため、時期差などの検討はできない。以下では全体の貝種組成(第3表)を使って記載を行う。

同定した1万5千個体余りのうち、イボキサゴは1万4千個体(91.2%)を占めており、唯一の主体種といえる。殻を徹底的に割り砕いた「破碎キサゴ」も多数含まれている。イボキサゴが9割を占め、1～3%程度の割合で、イボキサゴ漁で混獲したウミナ科とアラムシロが混じる様相は、都川以南の中期大型貝塚に共通する特徴である。ウミナ科を食用にした場合につく食痕は認められず、小さな個体に偏っているので、混獲としてよいであろう。イボキサゴ以外の貝種は、通常と異なる特徴が見られる。①ヤマトシジミがハマグリよりも多いことと、②外洋種のダンベイキサゴとチョウセンハマグリがかなり混じることである。この2つの特徴は、東京湾東岸域の縄文時代において初めての事例とみられる。また、バカガイが混じる点も注目される。本種はハマグリと同じ漁場に多産するが、中期大型貝塚ではきわめて稀であり、採取を避けていた可能性が高い。わずか3点ではあるが例外的なものとみてよいであろう。

第 1 表 貝類種名一覧

			縄文	平安	
腹足綱					
原始腹足目	ニシキウズガイ科	イボキサゴ	○	○	<i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i>
		ダンベイキサゴ	○		<i>Umbonium (Suchium) giganteum</i>
		スガイ	○		<i>Lunella coronata coreensis</i>
中腹足目	リュウテンサザエ科		○		
	カワニナ科	カワニナ	○		<i>Semisulcospira libertina</i>
	ウミナナ科	ウミナナ科	○	○	<i>Potamididae</i> sp.
	タマガイ科	ツメタガイ	○	○	<i>Glassaulax didyma</i>
新腹足目	アクキガイ科	アカニシ		○	<i>Rapana venosa</i>
	ムシロガイ科	アラムシロ	○	○	<i>Reticunassa festiva</i>
二枚貝綱					
フネガイ目	フナガイ科	サルボオ		○	<i>Scapharca subcrenata</i>
ウグイスガイ目	イタボガキ科	マガキ	○	○	<i>Crassostrea gigas</i>
マルスダレガイ目	バカガイ科	シオフキ	○	○	<i>Mactra quadrangularis</i>
		バカガイ	○	○	<i>Mactra chinensis</i>
		マテガイ		○	<i>Solen strictus</i>
	マテガイ科	マテガイ		○	
	シジミ科	ヤマトシジミ	○		<i>Corbicula japonica</i>
	マルスダレガイ科	ハマグリ	○	○	<i>Meretrix lusoria</i>
		チョウセンハマグリ	○		<i>Meretrix lamarckii</i>
		アサリ	○	○	<i>Ruditapes philippinarum</i>
		カガミガイ		○	<i>Phacosoma japonicum</i>
		オキアサリ	○		<i>Gomphina (Macridiscus) aequilatera</i>
		オキシジミ	○		<i>Cyclina sinensis</i>
		オオノガイ		○	<i>Mya arenaria oonogai</i>
オオノガイ目	オオノガイ科				
計	14科	21種	16種	14種	

第 2 表 同定結果

種名	①	②	③	合計
イボキサゴ	5711	2175	6134	14020
ダンベイキサゴ	39		3	42
スガイ	1	1	4	6
カワニナ	1		1	2
ウミナナ科	140	2	140	282
ツメタガイ	1		8	9
アラムシロ	62	8	76	146
マガキ	53		41	94
シオフキ	25		7	32
バカガイ	1		2	3
ヤマトシジミ	37	1	479	517
ハマグリ	71	16	102	189
チョウセンハマグリ	24		3	27
アサリ	4		5	9
オキアサリ			1	1
オキシジミ	1		1	2
合計	6171	2203	7007	15381
微小貝	50	8	32	90

第 3 表 貝種組成(縄文中期)

種名	全体	%	生息域	主体
イボキサゴ	14020	91.2%	内湾	主体
ヤマトシジミ	517	3.4%	汽水	多い
ウミナナ科	282	1.8%	内湾	
ハマグリ	189	1.2%	内湾	
アラムシロ	146	0.9%	内湾	
マガキ	94	0.6%	内湾	
ダンベイキサゴ	42	0.3%	外洋	少ない
シオフキ	32	0.2%	内湾	
チョウセンハマグリ	27	0.2%	外洋	
ツメタガイ	9	0.1%	内湾	稀
アサリ	9	0.1%	内湾	
スガイ	6	0.0%	内湾	
バカガイ	3	0.0%	内湾	
カワニナ	2	0.0%	淡水	
オキシジミ	2	0.0%	内湾	
オキアサリ	1	0.0%	内湾	
合計	15381	100.0%		

計測値 第 4 表に計測値分布を示した。主体種のイボキサゴは平均±標準偏差が11.6mm±1.1mmと、小さく粒ぞろいである。平均サイズは、小形のものが多く中期大型貝塚のなかでも特に小さい。比較の基準として、多数のサンプルの分析を行った千葉市有吉北貝塚のデータを見ると、平均は13.1mmで、11.7mm～14.5mmに収まる個体が多い。サンプルごとにみると平均の最小は11.5mm、最大は14.4mmであった(西野1999)。盤洲干潟の成長観察(1歳:12.2mm、2歳:18.1mm、3歳:21.2mm。佐藤2012)からみると、1歳から1.5歳が主体とみられる。蔵立集落の人々は、満1歳程度のイボキサゴを中心として、小さいものでは1歳未満の幼貝、大きくても1.5歳くらいまでを採取していたとみられる。ハマグリについても、平均は28.8mm±9.4mmで、1歳前後が中心である。また、幼貝も採取している。外洋種のチョウセンハマグリについても、ごく小さく、15mm以下のものまで採取している。ダンベイキサゴも九十九里沿岸の中期貝塚で採取されたものより一回り小さい。全体として資源管理の意識が認められず、大きさにこだわらずに採取したものとみられる。

第4表 貝類計測値分布(縄文中期)

イボキサゴ		ダンベイキサゴ		ウミナナ科	ハマグリ		チョウセンハマグリ	マガキ	ヤマトシジミ
mm	殻径	mm	殻径	殻高	mm	殻長	殻長	殻高	殻長
-8.0		-10.0			-10.0		1		
-9.0	3	-12.5		1	-15.0	3	4		2
-10.0	29	-15.0		3	-20.0	4			1
-11.0	131	-17.5		10	-25.0	20	3	7	3
-12.0	201	-20.0		12	-30.0	24	7	12	25
-13.0	119	-22.5	1	21	-35.0	20	7	20	70
-14.0	38	-25.0	1	8	-40.0	7		13	80
-15.0	6	-27.5	24	9	-45.0	1	1	5	37
-16.0	6	-30.0	12	5	-50.0			3	5
-17.0		-32.5		1	-55.0			3	
-18.0		-35.0	1		-60.0				
-19.0		-37.5			-65.0	1			
-20.0		-40.0			-70.0				
試料数	533	試料数	39	70	-75.0				
平均	11.6	平均	27.0	21.3	-80.0				
標準偏差	1.1	標準偏差	1.8	4.2	-85.0	1			
					試料数	81	23	63	223
					平均	28.8	25.4	34.0	22.6
					標準偏差	9.4	8.4	7.7	2.7

第5表 標準貝類相 貝類200個体の標準的な種・サイズ組成

採取量			別表1		別表2					
種名	個数	サイズ	mm	イボキサゴ	mm	ヤマトシジミ	ウミナナ科	ダンベイキサゴ	ハマグリ	マガキ
イボキサゴ	182	別表1	-9.0	1	-12.5					
			-10.0	10	-15.0					
ヤマトシジミ	7	別表2	-11.0	45	-17.5		1			
			-12.0	69	-20.0	1	1			
ウミナナ科	4	別表2	-13.0	41	-22.5	2	1			
			-14.0	13	-25.0	3			1	
ハマグリ	3	別表2	-15.0	2	-27.5	1	1	1		
			-16.0	2	-30.0				1	
アラムシロ	2	未計測			-32.5					
					-35.0				1	1
マガキ	1	別表2	合計	182	合計	7	3	1	3	1
ダンベイキサゴ	1	別表2								

標準貝類相 サンプル一定量当たりの平均的な個体数・サイズのばらつきを示した「標準貝類相」を算出し(第5表)、サンプル内の貝殻により構成を復元した(第4図)。通常は1リットルあたりで算出しているが、今回は採取量の記録を忘れてしまったため、個体数200個あたりとした。ダンベイキサゴとヤマトシジミが混じる中期としては得意なあり方がよくわかる。

(2) S54の分析結果

貝種組成 平安時代のS54では11科14分類群の14,872個体を同定した(第1・6表)。採取前の量は不明であり、水洗後の量は大きめの整理箱約3箱分である。主体となるのは89.2%を占めるイボキサゴである。そのほかの貝種は少ないが、カガミガイ・アサリ・ハマグリ・シオフキの二枚貝4種が比較的まとまっている。マテガイも食用に採取されたものであろう。アラムシロとウミナナ科はイボキサゴ漁に伴って混獲されたものとみられる。

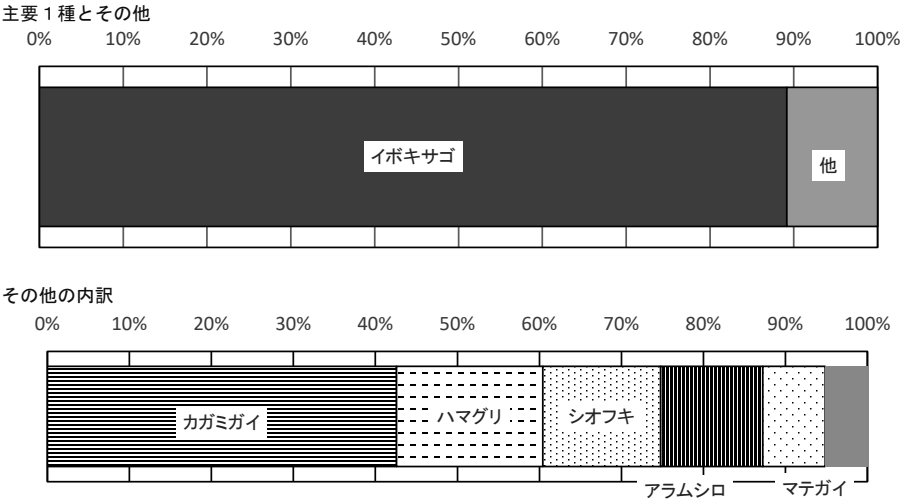
計測値 第7表に計測値分布を示した。イボキサゴは、第4表の縄文時代のものと比較するととても大きい、平均17.7mmという値は、この時期として平均的である。二枚貝のなかでは、シオフキ・アサリ・カガミガイについては大きい個体を選んでいるのに対し、ハマグリは大きさにこだわらずに採取しており、貝種によるえり好みが見られる。



第 4 図 標準貝類相

表 6 貝種組成(平安)

種名	個体数	%
イボキサゴ	13262	89.2%
カガミガイ	571	3.8%
アサリ	269	1.8%
ハマグリ	239	1.6%
シオフキ	193	1.3%
アラムシロ	167	1.1%
マテガイ	102	0.7%
ウミナナ科	53	0.4%
ツメタガイ	6	0.0%
マガキ	6	0.0%
アカニシ	1	0.0%
オオノガイ	1	0.0%
バカガイ	1	0.0%
サルボオ	1	0.0%
合計	14872	100.0%



第 7 表 貝類計測値分布(平安)

mm	イボキサゴ	mm	ハマグリ	シオフキ	アサリ	カガミガイ	イボキサゴは殻径 二枚貝は殻長を計測
-15.0	2	-25.0	2				
-16.0	13	-30.0	29				
-17.0	52	-35.0	62	4	2		
-18.0	62	-40.0	48	35	21		
-19.0	42	-45.0	16	65	87		
-20.0	21	-50.0	11	74	86	3	
-21.0	6	-55.0	5	19	3	22	
-22.0	2	-60.0	6	3		51	
試料数	200	-65.0	7		1	94	
平均	17.7	-70.0	3			29	
標準偏差	1.3	-75.0	5			1	
		-80.0	5				
		-85.0					
		-90.0					
		-95.0	1				
		試料数	200	200	200	200	
		平均	39.8	44.4	44.3	60.7	
		標準偏差	12.8	4.6	3.5	4.2	

(3) 考察

中期大型貝塚群では、主に利用する貝種、持ち込んではいけない貝種などについての明確な基準をもっていて、なんらかの決まりごとや規制が働いていたものと考えられる。当時、東京湾沿岸にはイボキサゴ・ハマグリを主体とする貝塚が、九十九里沿岸ではチョウセンハマグリ・ダンベイキサゴを主体とする貝塚が存在した。両地区の集落間は12~13kmの平坦な陸路で結ばれており、頻繁な往来や、九十九里側から東京湾側への物資の持ち込みがあったことが想定されている。それにもかかわらず、東京湾側の貝塚ではチョウセンハマグリとダンベイキサゴがほとんど出土しないのである。今回、初めてまとまった出土をとらえた意義は大きい。さまざまな点から、中期大型貝塚群の社会のなかで徹底されたルールが、ここでは守られていないのである。

(4) 蕨立遺跡の特徴

蕨立遺跡「北群」からは総量1.7kgの黒曜石が出土している。千葉市内の事例としてはとても多く、大きな破片が目立っている。とくに47号住居跡からは計385点(752g)がまとまっており、全体の半分がここから出土している。うち147点について、蛍光x線による原産地分析を行ったところ、143点(98.6%)が伊豆諸島・神津島産、1点が不明、1点が長野・星ヶ塔産と同定された。中期大型貝塚ができる前の阿玉台式前半期から、中期大型貝塚ができて消滅するまでの間、大量の神津島産黒曜石が千葉に持ち込まれた。大型貝塚形成以前には大きな破片が多く、大型貝塚形成期に大きなものがほとんど出ないという明確な特徴がある。通年定住型の集落では、小さくなるまで徹底して使われたものとみられる。狩猟好適地から大規模な居住地へと変化した様子をよく示している。また、前述のように蕨立遺跡では多数の埋葬人骨がみつかっている。竪穴住居跡に複数個体を埋葬した事例が複数あり、頭に土器をかぶった例、耳の近くから土製耳飾が出土した例など、いずれも貴重な事例である。

(5) 蕨立遺跡とさら坊貝塚

千城台区画整理事業は、辰巳団地建設協会(千葉県都市公社・千葉市・京成・野村・三井)を主体として昭和40年(1965)~48年(1973)に行われた。施行面積207.0ha、計画人口28,000人と、埋立地を除くとおゆみ野、あすみが丘に次ぐ大規模な区画整理事業で、当時としては市内最大の開発であった。

発掘調査が行われた昭和41年は、加曽利貝塚の全面保存が決定した翌年で、国と住宅公団による「埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」が交わされた年に当たる。これにより地方行政主体の発掘調査の方針が確立されていくが、文化庁が創設されたのは昭和43年、千葉県文化財課が設置されたのは昭和44年である。発掘調査体制が整う直前に蕨立遺跡とさら坊貝塚は失われた。このころ、大型貝塚の取り扱いが明暗がはっきり別れている。昭和43年には千葉市犢橋貝塚(さつきが丘団地造成)、昭和46年には千葉市荒屋敷貝塚(京葉道路二期)の保存方針が決まったが、昭和45年には木更津市祇園貝塚がほとんど調査をしないまま破壊されてしまった。

台地上の集落は全壊したが、坂月第1調整池・千城台野鳥観察園・千城台西公園は、蕨立遺跡とさら坊貝塚の脇の谷津と斜面林を保全したものである。大道山支谷の上流部には坂月市民の森もある。周囲のほとんどが宅地化されたなかで、加曽利貝塚のある古山支谷とともに、二つの谷の景観が保全された意義は大きい。地下には縄文時代の層も保存されている可能性が高く、将来の調査に期待がかかる。また、武田宗久や高校生たちが残してくれた資料は当遺跡にとっては勿論、地域にとってきわめて重要なものであり、住民や子供たちに存在を知ってもらえるよう努めていきたい。

文献

青沼道文・建石徹・古谷渉・森本剛2001「千葉市内縄文時代中期遺跡出土黒曜石の原産地推定」加曽利貝塚博物館紀要28

岡崎文喜他1980『蕨立遺跡』（手書きの簡易報告）

岡崎文喜・石井穂・津田芳男1982『遺跡研究論集Ⅱ 蕨立遺跡を中心とした縄文時代中期初頭集落址の研究』遺跡研究会

後藤和民1974「蕨立・さら坊貝塚」『千葉市史 第1巻 原始古代中世編』

佐藤武宏2012「東京湾盤洲干潟におけるイボキサゴの成長について」神奈川県立博物館研究報告・自然科学41

千葉市史編纂委員会1976「蕨立貝塚」『千葉市史 史料編1』千葉市

武田宗久1951『蕨立貝塚発掘報告』

武田宗久1953「原始社会」『千葉市誌』千葉市

武田宗久1955「千葉県千葉市蕨立貝塚」『日本考古学年報』4

武田宗久1966『千葉市坂月町蕨立貝塚発掘調査報告書』（手書きの県教育委員会充て報告文）

武田宗久・坂東敏樹1966「千葉市蕨立貝塚発掘レポート」郷研1、千葉県立千葉高等学校郷土研究クラブ

武田宗久・相京邦彦他1977『蕨立遺跡－千葉市における北総線No.65鉄塔建替工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－』蕨立遺跡
発掘調査団

武田宗久1953「原始社会」『千葉市誌』千葉市

西野雅人1999「千葉市有吉北貝塚のイボキサゴ殻径計測」『研究紀要19』千葉県文化財センター

西野雅人 2008「縄文中期拠点集落の消滅と小規模集落」千葉縄文研究2

西野雅人2017「貝類」『史跡加曽利貝塚総括報告書』千葉市教育委員会

西野雅人・岸本高充2021『千葉市昭和の森遺跡群Ⅲ－辰ケ台遺跡・屋敷内遺跡・東城楽台遺跡他－』千葉市教育委員会

付録 千葉市坂月町蕨立貝塚(南群)発掘調査概要

昭和26年及び昭和41年の調査は未報告であるが、調査後に作成された手書きの概要報告が存在する。昭和54年の調査は、縄文時代の成果のみ報告されたが(岡崎・石井1982)、古代については未報告である。

未報告分の出土遺物や写真等は千葉市埋蔵文化財調査センターが保管しており、今後整理作業を実施して、報告書を作成する予定である。ただし、当面は着手できない状況にあるため、一般には存在が知られていない、以下の概要報告の本文と表を付録として掲載することにした。文章は、明らかな誤りを改め、現代語表記とした。＜＞内は今回付けた注釈である。文中にある図は添付しない。写真についてはフィルムが残されている一部を掲載する。

Ⅰ 「蕨立貝塚(昭和26年)発掘報告(略報)」

Ⅱ 「蕨立貝塚昭和41年発掘調査概要報告」

Ⅲ 「東金高等学校考古学クラブ文化祭発表要旨」

Ⅰは、昭和26年4月の『千葉市誌』編纂に伴う調査の概要報告であり、調査を担当した武田宗久による手書き原稿である。加曽利貝塚博物館保管の「武田宗久資料」に含まれていたものであり、実際に提出されたものと同一である保証はない。ⅡとⅢは昭和41年3月～5月の千城台団地造成に伴う調査の概要である。Ⅱは小高春雄氏保管のコピーをお借りして内容を入力した。なお、東金高等学校考古学クラブによる概要報告は、千葉市内の遺跡としては辰ケ台遺跡と野呂山田遺跡のものがあり、前者は昭和の森遺跡群の報告書に転載した(西野・岸本2021)。Ⅲは簡易製本された原本を千葉県教育振興財団文化財センター図書室が保管しており複写させていただいた。

このほかに「蕨立遺跡調査報告書」と題した昭和54年の北群の発掘調査の手書きの報告がある。これについては報告書が刊行されているため(岡崎・石井1982)、本文の再掲は行わない。ただし、奈良・平安時代の遺構については未報告である。掘立柱建物跡・住居跡・土坑の挿図と写真図版のコピーが貼りつけられており、これが唯一残された記録である。

I 蕨立貝塚(昭和26年)発掘報告(略報)

＜昭和26年文化財保護委員長あての手書きの略報、またはその下書き。原文は縦書き＞

1 所在地

千葉市坂月町坂月小字蕨立379番地

2 現状

別紙実測図Ⅰ＜省略＞の如き台上に点々小貝塚が6ヶ所に分布する。

便宜上A・B・C・D・E・Fの地点と仮称する。

3 調査期日

昭和26年2月28日より同年3月8日迄

4 調査方法

A地点及びB地点に所在する貝塚を上部より順次に下部に向かって水平的に掘り進み、遺物及び同地域内部に遺存する構築物を層位学的に検討した。

5 遺物の種類

○ 人工遺物 縄文式土器多類(編年型式は加曽利E式)、石器(打製及び磨製)土錘、石鏃(主として黒曜石)、骨製加工品(鯨骨)、貝輪、滑車型土製耳飾、猪牙製加工品、骨鏃等

○ 自然遺物

A. 貝類 ハマグリ、アサリ、キサゴ、イボキサゴ、シオフキ、ウミニナ、イボウミニナ、ホソウミニナ、マガキ、イタボガキ、アラムシロ、マテガイ、イボニシ、オキアサリ、フトマテガイ、バイ、バカガイ、カワニナ、ツメタガイ、アカニシ、ニホンシジミ、カガミガイ、ベンケイガイ、ツノガイ、オオノガイ、サルボウ、マツカサガイ、ナガニシ、ヘタナリ、キセルガイ、ヒダリマキマイマイ、ナミマガシワ、以上32種、これらのうちアサリ、キサゴ、ハマグリ、シオフキ、カキが最も多く見出された。

B. 哺乳類 鯨、鹿、猪、犬、タヌキ、その他不明のものあり。

C. 魚類 タイ、フグ、サメ、その他不明のものあり。

6 主な遺構

○ A地点(実測図Ⅱ) 貝層下約43センチメートルにして2つの堅穴が複合して発見され、(表土より90センチメートル)、一方の堅穴の床面はこれより更に30センチメートル下底にあった。浅い方の堅穴の床面の一部には炉址と散乱人骨、柱穴、人口遺物(土器片)とがあり、深い方の堅穴の床面にも若干の柱穴が発見されたが、周囲の自然的条件が完全発掘を困難としていたので、以上の調査をもって中止せざるを得なかった。

○ B地点(実測図Ⅲ) 貝層下約50センチメートル(表土下約1メートル50センチ)にして二つの堅穴が重複して発見された。北西方のものを1号堅穴、南南西のものを2号堅穴と仮称す。

1号堅穴は完掘されその形貌が明らかにされた。即ち長径5メートル62センチ、側壁の高さ平均63センチメートル、楕円形を呈し中央より少々北西に炉一箇を設け、支柱穴6ヶ所(深さ48センチメートル以上1メートル5センチに及ぶ)を配

する。周溝は明瞭でないが南方隅の一角に痕跡を認める。支柱穴の主なるものは側壁にそって点々所在し、南西側のものは2号竪穴の床面に切断されている為、この竪穴の支柱穴と合して巨大な形を呈し、これによって2号竪穴は1号竪穴が廃棄された後に作られたことを物語る。床面上の遺物は加曽利E式土器1ヶだけであったが、床上の黒色を呈した腐植土の上部約15センチメートルの所に2体の人骨が別々に発見された。即ち1号人骨は東隅に近くあって、胴体以上が旧形を残し下肢は保存状態極めて悪く粉状となっている為に、その形態を窺うことが出来ない。併し胴体以上の埋葬方法は珍しくも所謂甕被葬であって仰臥南枕と為し、頭部には口縁部の欠失した深鉢形土器を完全に被せてあった。2号人骨は西方隅に位置し、北枕横臥屈葬で下肢の方向は南々西、顔面を西北に向け、上肢と下肢とは各々密接して居り両足部は八の字形に開いていて、恰も人為的に何かでしばったような格好となっていた。副葬品と認むべきものは無いけれども、耳辺に滑車型土製耳飾が発見された。

7 考察

蕨立貝塚は6ヶ所の小貝塚群をもって構成され、これが本地域に設定された縄文式中期の一集落単位であったものと考えられる。由来千葉溪谷に於けるこの時期の貝塚は概ね大規模のものが多く、殊に馬蹄状をなすものがその特色とも見られことからいずれも相当の大集落でしかも長期間の定住生活を営為していたものと考えられるけれども、稀には本貝塚の如くごく一時的の集落もあったことが立証される。本貝塚が何故小規模のものに終わったかは、周囲の自然的条件が長期集落の設定に対して何らかの都合の悪い現象があった為であろう。馬蹄形貝塚も最初にはこうした円状に点々所在した小貝塚群の拡大の結果によるものであろう。本貝塚発見の完形竪穴の形式は楕円形を呈し、支柱穴6ヶ所を配し、中央より少々北寄りに1ヶの炉趾を有するもので、中期時代に共通する特色をもって居る。床内部に遺存したもののうち、特記すべきものとしては、B地点1号人骨の埋葬状態であろう。即ち仰臥南枕と為さしめた甕被葬であって、この甕の形式が加曽利E式新であることから縄文中期後半に於いて関東地方にはこの種葬法のあったことが立証されたことは、極めて意義深いことと考える。

昭和 年 月 日

右調査責任者 武田宗久

文化財保護委員長 高橋誠一郎殿

『東金高等学校考古学クラブ文化祭発表要旨』（昭和35～40）抜粋、手書き資料を文字入力（一部現代仮名遣いに改めた）

II 坂月貝塚について

＜蕨立遺跡の旧称のひとつ＞

昭和41年度 文化祭

所在地 千葉市坂月町坂月俗村蕨立378・379

調査期日 昭和26年2月26日～3月8日

調査者 千葉市誌編纂委員会（武田宗久氏他）

調査概要 千葉市を貫流する都川の作る一支溪谷たる仮称大道山支谷に西南する洪積台地上に所在する6ヶ所の小貝塚群中の2ヶ所において竪穴住居址を発掘した。

貝類 内湾的浅海砂泥性のものが大部分で、ハマグリ・イボキサゴ・シオフキ・アサリ。外にウミニナ・イボウミニナ・マガキ・イタボガキ・ホソウミニナ・マガキ・アラムシロ・マテガイ・イボニシ・オキアサリ・バカガイ・カワニナ・ツメタガイ・アカニシ・ヤマトシジミ・カガミガイ・ベンケイガイ・ツノガイ・サルボウ・マツ

カサガイ・ナガニシ・ヘナタリ・キセルガイ・ヒダリマキマイマイ・ナミマガシワ等

鳥獣魚骨類 鹿・猪・鯨・犬・鯛・鮫・フグ

人工遺物 縄文式土器(加曽利E式の新)が多数。打製石斧・磨製石斧・石鏃・土錘・滑車型土製耳飾・猪牙製斧・骨鏃・鯨骨製加工品・貝輪等

三校による坂月貝塚発掘

調査期日 昭和41年3月25日～5月15日

調査概要 先ず、ボーリング等による予備調査を行ない、特に貝類の分布する部分を調べ3つのトレンチを千葉高・市立千葉高・東金高と各々受け持った。わが高はIトレンチ。トレンチの大きさは6メートル四方でその上面はブルドーザによって削られており、除土作業を行なうと、住居址の一部を発見。さらに東西に2メートル、南北に4メートルの拡張区を設け発掘を続行。2つの堅穴が重複していることがわかり、南北に8メートル、東西に6メートルの拡張区Ⅰトレンチを設定。遺物は、出土量豊富とは言えなかった。

自然物—カキ・キサゴ・アカニシ・マテガイ・アラムシロの貝類の外

獣類—鹿・猪

文化遺物—縄文中期に属する小形土器・石鏃・石斧・縄文中期土器(加曽利E式)の破片 多数、その他

Ⅲ 千葉市坂月町蔵立貝塚発掘調査報告書

1 遺跡の現状と周囲の状況

本貝塚は現在の東京湾から東に約6kmの距離にあり、東金街道の北側に面する洪積層台地の一部で、そこは都川本流に注ぐ一支谷に面し、近くにはサラボー貝塚、台貝塚などがあり、遺跡のある最高所の標高は37mである。(別紙「千葉市蔵立貝塚と周辺の地形」参照)＜この図は残されていない＞

2 本遺跡発掘調査の理由

昭和37年に、千葉市及び周辺の人口が京葉臨海工業地帯、内陸工業地帯の産業発展によって急激に増加しつつあるので、隣接する小倉団地とともに、新住宅都市を建設する目的で、千葉県、千葉市、民間三社(三井不動産、京成電鉄、野村不動産)が事業主体となり、共同出資運営する坂月ニュータウン建設協会を設立、坂月町、大草町、小倉町、金親町、泉町にかけて面積216ヘクタール(約650,000坪)を買収する計画がたてられ、昭和41年3月に入っていよいよ蔵立貝塚がブルドーザー等による整地作業によって破壊されつつある現状を知ったので、やむを得ず緊急に発掘調査を行い、本貝塚の性格を記録にとどめるためである。

3 調査概要

(イ) 発掘の経過

蔵立貝塚発掘調査団が主体となり、千葉県立千葉高等学校郷土研究クラブ、千葉市立高等学校社会科クラブ、千葉県立東金高等学校考古学クラブ、並びに地元の有志が参加し、昭和41年4月8日より、同年6月15日まで行った。発掘担当者は武田宗久、指導助手は川戸彰、穴倉昭一郎である。

(ロ) 発掘の状況

本遺跡はすでに昭和26年4月千葉市教育委員会が調査を行い、6ヶ所の小貝塚群を発見し、そのうち、1ヶ所の発掘を試みた結果、堅穴住居趾2ヶが重複して存在すること、このうちの1住居趾には2体の人骨と若干の加曽利EI式に居する

遺物が包含されていること等が確認された(「千葉市誌」昭和28年、千葉県石器時代遺跡地名表)昭和34年)

更に今回の調査にあたり、発掘前に精密な実地測量とボーリングによる結果並びにすでにブルドーザー等による整地作業の進行にあつて露出した貝塚を合計すると28ヶ所を数えるにいった。

これらの貝塚はいずれも2坪以内の小面積のもので、別紙竪立貝塚実測図に添付されず。岡崎他1982に所収のものを指すか>にある如く、貝塚群が馬蹄形を呈する。調査の都合から以上の貝塚群をA・B・C・D・E・E'・E''・F・G・G''・G'''・H・H'・I・I''・J・Kの各地区に分類した。尚昭和26年に発掘した竪穴住居跡は、E'とE''地区に相当する。発掘の順序はこの馬蹄形を呈する貝塚群のうち、E～K地区にわたる部分がすでにブルドーザー等によって可也荒らされている現状を考慮して最初に行いA～E'地区を第2次の調査に予定した。併し、結果としては本遺跡にふさわしくない僅少な調査日数と僅少な経費によってA・B・C・Dの一部、E''・Gの一部等が未発掘に終わり、更に貝塚を伴わないが、遺跡の重要な部分とみられる馬蹄形円部の調査が行われ得なかったことを遺憾とする。

A 貝塚群の規模と地形との関係

馬蹄形に点在する28ヶの貝塚の最大径はB-G''間、B地区の竪穴の東南壁からG''地区の竪穴の西北壁までの距離は103mである。又D-J地区の距離は90.2m、開口部と思われるA-K地区の距離は約65mを算する。地形は西南方に傾斜し、D地区が最も高く標高36～37m、G''地区とI地区が最も低く33mであつて、開口部の方向は南方を向き、比較的浅い谷に面している。又馬蹄貝塚群中央部は浅い皿状の凹地となっている。D地区との比高は3mである。

B 竪穴住居跡と遺物

上表の如く昭和26年4月に発掘したE'・E''と今回発掘したB・D・E・G地区の5ヶ所、G'''・H・H'・I'・Ia・Ib・Ic・J・Kの合計19ヶの竪穴群のうち最大なものはG地区の長径7.80m、短径6.97mのものであり、最小はH'

地区	長径	短径	主柱穴	炉の位置	炉の構造	周溝	入口	時期・その他	備考
B	4.90	4.86	6	中央より北東	焼土	あり	南西?	加曽利EI	南西部攪乱
D	4.78	4.30	5	中央より北西	焼土	あり	南西?	加曽利EI	重複
E	5.90	4.20	6	中央より北西	土器	あり	南東	加曽利EI	床に特殊遺構
E'	5.62	5.26	6	中央より北東	焼土	あり	南	加曽利EI	昭和26年調査。人骨2
E''	?	?	?	?	?	あり	?	加曽利EI	昭和26年調査。一部発掘
G	?	?	?	中葉より東	焼土	あり	南?	加曽利EI	重複
G	?	?	?	中葉より北	土器	あり	南	加曽利EI	重複。人骨1
G	7.80	6.97	6?	中葉より北	土器	あり	南	加曽利EI	重複
G	5.37	4.75	5	中央より北西	焼土	なし	?	加曽利EI	重複
G	?	4.77	?	中央より北西	焼土	あり	南?	加曽利EI	重複
G'''	5.90	4.33	5	中央より北西	土器	あり	南西	加曽利EI	単独
H	5.30	4.00	6?	中央より西	焼土	なし	東	加曽利EII	単独
H'	3.90	2.96	4	中央より北東	土器	なし	南西	加曽利EII	単独
I'	5.02	4.42	5	中央より北西	焼土	あり	南西	加曽利EI	重複
Ia	5.68		5?	中央より北西	焼土	なし	南東	加曽利EI	重複
Ib	5.20	4.64	6	中央より北西	焼土	なし	南西	加曽利EI	重複
Ic	?	?	5	中央より北西	焼土	あり	?	加曽利EI	重複
J	5.50	4.72	6	中央より北	焼土	なし	南	加曽利EI	単独、人骨1
K	4.56	3.86	5	中央より北西	焼土	なし	南西	加曽利EII	単独、人骨3

の長径3.90m、短径2.96mである(但し重複又は一部未発掘のため計測不能なものを除く)。堅穴の平面形は円、又は楕円形を呈し、主柱穴は6～4、炉の位置は中央部よりやや北方に設けられ、内部に中形の深鉢状の土器の胴部以下を切除したものを水平にいけてあるものが4堅穴に見られた。このうち加曽利EⅠ式土器はE・G^Ⅲ、加曽利EⅡ式土器はG・H^Ⅰである。周溝はあるもの12ヶ所で、床面からの深さは10～20cm程度の浅いもので、内部に点々と小穴を配置するものも見られた。堅穴の出入口と思われる部分の床面は原則として深さ15～20cm、幅40×50cm前後の凹地があり、周溝を伴う堅穴に附属する場合は例外なくこの部分だけ周溝を欠いていた。出入口の方向は、南東、南、南西、東の位置にある。堅穴の深さはB地区では現地表面から1.00m、ローム層の上面から0.94m、D地区では現地表面から1.00m、ローム層の上面から0.70mである。

昭和26年4月に発掘したE^Ⅰでは現地表面から1.33m、ローム層の上面から0.70mであった。E・E^Ⅱ・F・G・G^Ⅲ・H・H^Ⅰ・J・K地区は発掘開始時にブルドーザー等によって地表面が破壊され、ローム層の上部が削平されていた箇所が多かったので正確な壁高を示すことが困難であった。

C 大型ピット<小堅穴>

E地区a、F地区、G^Ⅲ地区a・b、G地区c・d・e・f・g・h・i、I地区はいずれも大型のピットで、截頂方錐形のものはF地区、G^Ⅲa・b、G地区c・e・f・g・h・i、円筒形のものはE地区a、G地区cであり、I地区aは未発掘のため不明である。このうち前者の代表的なものは別紙Fトレ実測図に示す如く、床部の直径1.82m、中央部に一本の小柱穴(直径0.13m、深さ0.37m)と床部の東南壁にそって不整円形(0.40×0.78m)の深い穴(床部から深さ0.57m)をうがつ。円筒形の代表的なものは別紙Eトレ実測図に示すaの如く、床部の直径0.48m、地上からの深さ1.32mである。これら大型ピットの床部はいずれも踏みかためられた痕跡はない。以下各ピットの状況を記するとE地区aは混土貝層、F地区、G^Ⅲ地区a、G地区e・fの5ピットはいずれも破碎されたキサゴ<イボキサゴ>の誤り。以下同様>をもって充満され、G^Ⅲbは截頂部の中央に胴部以下を欠失した中型加曽利EⅠ式土器を水平にうずめ、ピットの内部には一体の人骨を葬っていた。その状態は頭部を床面にして足部をピット側の壁面に立てかけた如き形で、あたかも死体を頭から投げ込み、足部を上にして壁面によせかけ、内部に破碎したキサゴを充満させ、その表面の中央部に土器1ヶを、胴部以下を除去して置いたような形をしていた。G地区cは混土貝層をもって充満されていたが、截頂部の中央に大型浅鉢土器の底部を欠失したものを水平に伏せて置き、その下に深鉢形土器4ヶをよこたえて並べ、更にその直下に一体の屈葬人骨を葬ってあった。これらの土器はいずれも加曽利EⅠ式に属するものである。G地区dは混土貝層を充満した円筒形のピットであるが、床部に大形深鉢形土器の底部を欠失したものを伏せて置き、内部に小児骨を入れてあった。土器は加曽利EⅡ式である。G地区g・h・iはいずれも混土貝層のみを充満させていた。I地区aは未発掘であるが、上部には破碎したキサゴが充満されていた。

D 堅穴に発見された人骨の埋葬状態

人骨の発見された堅穴は、昭和26年4月の発掘でE^Ⅰから2体、今回の発掘ではG地区から1体、J地区1体、K地区3体である。E^Ⅰ堅穴発見の1号人骨は床面上約0.15mの黒土層の上に口縁部を欠失した深鉢形土器(加曽利EⅠ式)を頭部にかぶせて埋葬した。仰臥南枕であるが、胴部以下は保存状態極めて悪く、全く粉状となっていたためにその形状は不明である。2号人骨は、床面上同じく約0.15mの黒土層の上に北枕横臥屈葬で耳辺に滑車型土製耳飾が遺存した。

G地区のものは、頭部のみ保存され以下の部分は粉状となって僅かに散布を認めるにすぎない。J地区の1体は、床面上約0.20mの黒土層の上に仰臥北枕で両手を腹部にあて両足を伸展して脛骨の部分で交叉させていた。K地区の1号人骨は床面上に仰臥伸展され西枕、膝関節以下をやや西北方に曲げていた。2号人骨は床面上に仰臥北枕で胴部を西南に向け、骨盤以下を屈曲させていた。3号人骨は、同じく床面上に南枕仰臥伸展葬である。

E 堅穴住居跡に見られる特殊遺構

E トレンチに発見された堅穴住居跡は平面図が小判形を呈し、出入口とみられる東南部以外の側壁にそって一条の周溝を廻らすものであるが、この出入口の東南端から奥にむかって1.07mへだてた床面の中央部に、堅穴の長軸と直角の方向に、長さ0.96m、幅0.06mの細長い一条の溝を配し、更にこの溝の奥にある6本の支柱穴のうち5本の支柱穴を各々結ぶ一条の溝があり、これら6本の柱穴と5本の溝によってくぎられた長方形の内部の中央よりやや奥に加曽利EⅠ式土器(胴部以下を欠く)をすえた炉を設けてあった。上記の長方形の部分の面積は3.20m×1.85m(畳4枚弱)で、恐らく本住居の主室に相当する場所で、溝のない支柱穴間は、この部屋に出入するところであろうと推定される。(Eトレ実測図参照)

F B地区及びD地区堅穴住居跡の貝層断面

竈立遺跡はすでに述べた如く、発掘調査以前にブルドーザー等によって、上部の土砂を削平した部分が多く、殊にE～K地区は全く旧状を窺うことが出来ないまでに変形されていたが、A～D地区は破壊をまぬかれ、比較的良好に原状を保っていた。そこで、今回発掘したB地区及びD地区の堅穴住居跡の中に堆積されていた貝層の断面図のみについて記述せざるを得ない。

別紙断面図<省略>のことは住民が少なかったか或いは居住の時期が短かったか、又は両者が重なったか或いは貝が彼等の主食でなかったかであろうが、B、D地区以外の地区に見られる貝塚がいずれも2坪以内の小規模なものである点を考慮すれば、貝が彼等の主食でなかったことが推定される。貝の種類はキサゴが最も多く、次にハマグリ、シオフキ、アサリ、マガキ、ウミニナ、バイ、カガミガイなどが多いことは、この近くの浅海砂泥性の海浜から採集したことを示す。又B地区貝層の断面の⑤の如くヤマトシジミの層があることは、淡水と海水の接触する場所が近くにあったことを示すものである。粉碎されたキサゴの層が両地区の貝層の中に多量に見られる。この用途は必ずしも食料用に加工して汁だけをすすったものの残物とは解釈出来ないであろう。(B地区及びD地区貝層断面図参照)

(ハ) 出土遺物

A 人口遺物

加曽利EⅠ式土器、加曽利EⅡ式土器、土錘、土製滑車型耳輪、石皿、凹石、すり石、石ヒ、石鏃、打製石斧、磨製石斧、鹿角加工品、鯨骨製品、骨製針、貝輪、牙斧、琥珀製装飾品。(以上は調査担当者が整理中である。)

B 自然遺物

鹿、猪、犬、猿、鯨、珊瑚、各種魚骨、ハマグリ、アサリ、シオフキ、キサゴ、ウミニナ、オキアサリ、バイ、アカガイ、マガキ、マテガイ、アカニシ、サザエ、カガミガイ、バカガイ、ツメタガイ、サルボウ、アラムシロ、ヤマトシジミ。(以上は金子浩昌が整理中である。)

C 人骨9体(昭和26年4月発掘の2体を含む)(以上は小片保が研究中である。)

4 結言

A 今回の発掘調査が部分的にとどまり、遺跡の全域にわたる性格の究明が不完全に終わったことを遺憾に思う。本遺跡はすでに昭和26年4月に一部の発掘調査が行われ、

出土遺物一覧表

加曽利EⅠ式土器	ほぼ完形 2	破片 31
土錘	3	
土製滑車型耳輪	破片 1	
石皿	1	
凹石	1	
すり石	1	
石ヒ	1	
石鏃	2	
打製石斧	1	
磨製石斧	1	
鹿角加工品	破片 1	
鯨骨製品	破片 1	
骨製針	破片 1	
貝輪	破片 1	
牙斧	1	
琥珀製装飾品	破片 1	
人骨	1	

その成果は「千葉市誌」(昭和28年2月)に概報され、更に千葉県教育委員会発行の「千葉県石器時代遺跡地名表」(昭和34年3月)にも記載されているもので、学会周知の遺跡である。

B 本貝塚は都川溪谷に開口する一支谷の奥部に面する最高標高37mの洪積層合地に設けられた集落遺跡で発掘によって確認された貝塚は28ヶ所、これらはいずれも2坪以内の小貝塚で、貝層の下には殆ど例外なく堅穴住居趾又は大型のピットが発見される。

これらの遺構を実測図にもとづいて判断すると、遺跡の西南方に展開する浅い谷に向かって開口するいわゆる馬蹄型集落である。この集落成立の時期は、縄文文化期中期に位する加曽利EⅠ式土器とそれに次ぐ加曽利EⅡ式土器が製作使用された時期に限定される。この集落の最大径は103m、開口部の長さは65mである。(但し、これは発掘調査した地区を基本として述べたものであるから、将来未発掘の部分の調査によっては多少の変更があることも考えられる。)

加曽利EⅠ式期の集落で現在確認された堅穴住居趾はB・D・E・E'・E"・I・I'であり、加曽利EⅡ式期のものはG・H・H'・J・Kであって、これらによって構成された馬蹄形集落の各堅穴の出入口の方向は、いずれも南々至それに近い方向のものばかりであることが推定される。

各貝塚に見られる貝の堆積量は発見された全堅穴の住民がこれのみを食糧とすれば、わずかに数日間を保つにすぎない分量しかなく、又、貝塚内に遺存した獣魚骨の量も貧弱である。

堅穴住居趾は単独のもの(H・H'・J・K)と、重複又は拡張した痕跡をのこすもの(B・D・E'・E"・G・I'・I)があり、後者はかなり長期に使用していたことが察せられるのみならず、これらの周辺には大型ピットが多数存在した。これらのピットの第一次的な使用目的を示す遺物は、遺存しなかったけれども、恐らく食糧の保存貯蔵用の施設とする可能性が高い。

葬制は堅穴住居が廃捨された後に、この床面に埋葬される場合(E'・G・J・K)と、大型ピットの第一次使用目的が廃止された後、この穴を墓穴に使用する場合(G"b・Gc・Ga)がある。前者は原則として伸展葬で、E'堅穴の1号人骨が甕被葬であったのを除けば、特別の葬法を示すものはない。後者は、G"bピットの場合に於いては死体をさかさまにして墓穴に投げ入れ、空間に粉碎したキサゴを満たしピットの上部の中央に深鉢形土器の胴部以下を欠いたものを水平に置き、(口縁部を上にする)、さらにこの上にも粉碎キサゴを盛りあげた。次にGcピットの場合は死体をピットの床面上に屈葬して、その上に4ヶの中形の深鉢型土器を横にして並べ、更にその上に大型深鉢土器の底部を欠いたものを水平に伏せ、空間に貝の混入した土砂が入っていた。Gdの場合はピットの床面の一部に小児骨の入った中型の深鉢土器の底部を欠いたものを伏せてあった。

粉碎されたキサゴは上記G"bピットのほか、Fピット、G"aピット、Iaピットにも充満されて発見されたが、これらのピットの内部には外に何らの遺物は検出出来なかった。これらの状況から判断すると粉碎キサゴの用途は有機質の腐敗を防止する目的で、食糧その他の貯蔵用に使用したものかもしれない。

附記

蔵立貝塚を発掘中に本遺跡の北西部にダンベイキサゴ、ハマグリを主とする土師器の時代の貝塚があることと今回分析結果を掲載。ダンベイキサゴは縄文時代の誤り>、本遺跡の西南方にある谷を距てたむかい側の台地上に新貝塚が発見され、小字名にちなんでサラボー貝塚と仮称した。この貝塚は阿玉台式土器、加曽利EⅠ式を主とする中程度の集落遺跡であったが、すでに工事がすすめられており、遺物採集の段階にとどめざるを得なかった。



昭和26年・41年調査の主な写真